



創造情緒共鳴

八木 重典[†]

Creation Emotion Resonance

Shigenori YAGI[†]

業根譚(洪自誠)に私のとても好きな言葉がある。「友に交わるにはすべからく三分の俠気を帯ぶべし、人となるには一点の素心の存するを要す。」友情の真髄は俠気だ、人生の大事は素心であると言っている。しかも三分あるいは一点と述べ、そればかりやっておれと言わないのが奥深い。

私は電機会社でCO₂レーザーの放電励起の革新に従事し、以来レーザー加工機の開発、事業化に携わってきた。レーザー科学として何ほどのことはないかもしれないが、素晴らしくいい仕事に恵まれたのは確かなことだった。幸いにも事業はスタート以来35年以上堅調で、社内外に多くの師や知己といえる人々に恵まれた。

会社では慈父のように温かく見守ってくれた人、厳しいけれど誠実に的確賢明な指導をしてくれた傑出した上司がおられた。学会では普段とは違った視点から指導や指摘をいただき、いつも好意的に注目してくださる先生方がおられた。自分としてやや納得のゆく仕事を進められるようになったころ「育てていただいたのだ」という驚きに満ちた感激を味わったことがある。また企業における開発は製品の軸となる技術はもとより、製品の諸機能、さらに品質を支える膨大な周辺技術が必要である。レーザー加工機の場合、機械・伝熱・流体工学、メカトロニクス、電源技術、材料技術などは製品にとって必須であり、あるいは競争軸となる技術である。分野の違うこれらの専門家と、熱い議論や共同開発を続け、いつしか同志的な感情を共有する友人となった。

技術開発、とくに企業においてそれを進める方法論についての研究は盛んである。経済学の分野から多くの研究があり、最近では物理学の俊英が「文転」して議論を展開している。技術経営の手法は、企業の管理層になれば常石として理解しておくのは重要なので勉強はしたが、イノベーションは本来常道の外に起きるものだから、学んで革新的なことができるものではないだろう、それに何か大切なものが欠けている気がしていた。

実際、企業における製品開発は、機能・品質・コストに於いて不断の努力が要求される。研究によって課題を解決し、新製品として市場に送り出し、学術的なことは論文としてまとめ、何度か競合他社との競争をくり抜けたころ、心を揺さぶる喜びのようなものがあつた。仕事を通じて得た師弟関係や友情は代えがたい宝のようなものだ。技術開発の仕事にも人生的価値があるに違いない。

科学技術を進めるには、個人の持つ創造的な力が感激や共感によって共鳴する、仮にこれを創造情緒共鳴と呼ぼう、そのような場を構築する必要があるのではないか。情緒的な側面を重視した技術経営論があってもいいと感じている。

[†] 科学技術振興機構ACCELプログラムマネージャ(〒615-8510 京都市西京区京都大学桂)

[†] ACCEL Program Manager, Japan Science and Technology Agency, Kyotodaigaku-katsura, Nishikyo-ku, Kyoto 615-8510